

身、地域の日本語教室に出入りしていますが、地域の日本語教室は日本人にとっても大きな学びの場であると感じています。

日本語教室では外国籍の方々の抱える問題にしばしば直面します。その解決は容易ではありませんが、みんなと一緒に考え、自分たちの地域を考え、さらには社会を考える、そこから市民活動が育っていくように思います。市民活動はCINGAの目的でもあります。NPOとは行政のように確としたものではなく、アメーバのように動き、いろいろな組織を、人を、ものをつないでいく。そのような働きができるのではないかと考えます。

最後に、支援講座の課題ですが、お話ししたのは足立区における支援講座、足立区では「ボランティアのための講座」ではなく、「支援講座」と呼んでいらっしゃるのですが、日本語教室ボランティアのための講座、基礎編とでもいうものだと思います。その基礎編の一層の充実ということ、私たちはこれから目指したいと思います。そして先ほど、鈴木さんがおっしゃった中級講座、これも充実させていかなければいけないと思っています。そしてさらにより多くのボランティアの方々や行政関係者の共感が得られ、支持していただけるようなプログラム、そのようなプログラム作りが私たちの課題です。



## ■武蔵野市国際交流協会（MIA）

野山 次に武蔵野市国際交流協会（MIA）の河北さん、お願いします。

河北祐子 武蔵野市は、よく市長が自慢しているんですが、東京都のおへそに当たる東京都の真ん中に位置する人口約13万人の市です。そこに住んでいる外国人の登録者数は2,400人ちょっとですから、多くはないという地域です。ところ

が、東京都の真ん中に位置し、JR 中央線が東西に通っており、大変交通の便のいいところです。他地域からもたくさんの外国の方たち、あるいはボランティアもですが、この武蔵野の国際交流協会に集まってきています。武蔵野市は、いわゆる典型的な大都市郊外の住宅地域です。にぎやかな駅前商店街もありますし、いろいろな文化、教育施設も整っております。大変便利なところと言っていいと思います。

#### ◆ 自分たちで考えながら変えていく



河北祐子

日本語教室ですが、1989年に武蔵野市の国際交流協会が設立されて、その翌年から行われています。武蔵野方式として大変有名になりましたけれども、教室活動とそれから参加者（学習者）一人一人に日本人のボランティアを紹介するマンツーマン活動と呼ばれる活動が並行して行われる形で日本語教室をしています。現在は、武蔵野市の日本語教室はグループ形式で行われています。複数の参加者と複数の日本語ボランティアが参加するグループが複数、ひとつの教室に集まって日本語活動をしています（右上写真）。そしてその場のコーディネートをやる日本語学習支援コーディネーターと

いう存在がいます。私も日本語学習支援コーディネーターですし、それから今、お話をなさいました宮崎さんも同様のコーディネーターとして活動しています。最近は大変参加者が多様化してきました、日本語コースも多様化しました。例えば保育付きの「親子コース」であるとか、子どもたちだけを対象にした「個人レッスン中心コース夏休み特別子どもプログラム」、それから一般成人と一緒に小学生から参加できる「夜の日本語コース」などが行われています。MIAの日本語コースというのは、それぞれの市民、外国人も含めてですけれども、市民が持っている思いを形にする活動です。つまり、それは市民活動だということができると思います。今、MIAの日本語コースは4つありまして、曜日がそれぞれ違います。そして時間帯も少しずつ異なっています。1年を3期に分けて3期制で行われています。

お話しすると何か大変順調にきたように聞こえますが、武蔵野市の日本語教室は1人の日本語教師と複数の参加者がいる、いわゆる教室活動形式で始まりました。ところが、担当者は代わらないで同じように日本語を教えているのに、参加者が集まらない状況が起き、年々少なくなりました。担当者には理由が分かりま



せん。ところが、それを外から見ながら事業をコーディネートしている協会の職員には、どうも何かおかしい、やっていることがそこに来ている外国の方たちの求めているものではないのではないかと感じられていたようです。それで、私たちはそう感じた協会の職員と相談して、少しずつ日本語教室を変えてきました。その結果、今では「先生」はいなくなり、日本語ボランティアを私たちは「日本語交流員」と呼んでいます。元は「生徒」と呼ばれていましたが、日本語を学習に来ている学習者は「参加者」と呼ぶことになりました。参加者と呼ぶと日本人も外国の方も全部同じ立場になりますけれども、呼び方を変えるとともに、私たちの意識も変わってきました。「何々先生」なんて呼んでいたのが「何々さん」、「私のクラスの生徒」と言っていたのが、「何々グループの何々さん」というふうに表現も変わってきました。

#### ◆「まちづくり」にもつながる日本語コース

当時は、協会の職員が、何かこんな声がかかってくるんだけどとか、こんな要望が出ていますよと私たちに教えてくれていたのですが、協会の職員は日本語の専門

家ではありません。直接にグループ活動を担当することはありませんので、日本語コース全体の様子を外側から見る事ができるのです。ですから、コースの中で日本語学習支援コーディネーターが気づいたことを協会の職員や参加者の皆さんと一緒に話し合いながら、自分たちでコースをつくっています。

日本語コースの構成員ですが、申し上げましたように参加者と呼ばれる学習者がいます。それから日本語交流員、そして、日本語交流員ではないけれども、保育の方のボランティアをしてくださる保育スタッフという方たちがいます。それから日本語学習支援コーディネーター、もちろん教室の運営をいろいろな形で支えてくれる協会の職員もいます。これらの人たちが直接的に教室にかかわっています。時に応じて保育スタッフに、保育を勉強している大学の学生さんが加わることもあります。日本語教育を研究している大学院生などが教室のスタッフとして同じ立場でかかわって、コースをつくるということもあります。大変開かれたコースで、いろいろな人がいろいろなときにかかわってきます。

これからですが、教室の中にはみんなが同じ立場で参加するという多文化共生がある程度起きているような気がするんですが、コースが終わって参加者の方が「さよなら」と言って町の中に帰っていくとき、あるいは子どもたちが学校に戻っていったとき心配になるときがあります。多文化共生は日本語コースの中だけでいいのだろうか、それをどのように地域に生かしていけるのだろうか、それが私たちのまちづくりにつながっていくのではないかと、日本語コースはまちづくりにかかわっているのではないかというふうには感じています。

## ■ 質疑応答

**野山** 5人の報告をいただき、これから議論を会場になるべく開きたいと思います。報告は、それぞれ地域ごとに、あるいは団体や機関ごとに行っている活動および知識等々を含めて、共通している部分もありますけれども違うというところもあります。例えば、松山の有償ボランティアという言葉について、初めて聞いたという方もひょっとしたらいらっしやるかもしれません。質問、コメントがおりの方、手を挙げていただければ幸いです。

### ◆ ボランティアの有償について

質問者その① 横浜市国際交流協会から来ました。皆さんにお聞きしたいのです